

根治法ない難病脳腫瘍

金沢大の医学研究グループが、血糖調整酵素の働きを抑制する4種類の薬剤を組み合わせ、難病の脳腫瘍「悪性神経膠腫」の治療薬を開発した。従来の治療法に比べ、5カ月程度の延命効果が見込めるといふ。特許申請済みで、22日から大阪市で始まる日本癌学会で発表する。(榑原崇仁)

悪性神経膠腫は、根治方法が確立されていない脳のがん。周囲の脳に染み込むように広がるため正常部分との境界が不鮮明で、手術ですべてを摘出するのが難しい。現在は放射線治療や抗がん剤治療も併用している。発症から死に至るまでが平均十四カ月と短く、国内で年間約二千五百人が発症している。

同グループは、金沢大病院に入院する悪性神経膠腫の患者から検体を採って分析。体内で血糖を調整する酵素「グリコーゲン合成酵素キナーゼ(GSK)3β」が原因分子になっていることを突き止めた。

新治療薬を 金沢大が開発

浜田教授らグループ

延命効果上がる



悪性神経膠腫の治療薬について説明する浜田潤一郎教授ら。18日午後、金沢市で。

統合失調症や胃潰瘍などの薬剤にGSK3βの働きを抑える機能があることから、研究グループはそれらの薬剤をい

くなど副作用もあるため、「製薬会社の協力を得て、より効果的な治療薬を開発したい」としている。

調合して悪性神経膠腫の再発患者四人に投与。放射線治療や抗がん剤治療も行った。

その結果、再発から亡くなるまでの期間は平均十・二カ月となり、投与しなかった過去の再発患者六十八人の平均五・五カ月に比べ、大幅な延命効果があったという。

研究グループの浜田潤一郎教授(脳神経外科)は「最近三十年以上、悪性神経膠腫を患った後の生存期間は延びていなかった。今回の治療薬は大きな進歩」と説明する。

ただ意識レベルの低下を招